

# もくねじ

海野十三

青空文庫



倉庫そうこ

ぼくほど不幸なものが、またと世の中にあるうか。

そんなことをいい出すと、ぜいたくなことをいうなど叱しかられそうである。しかし本当にぼくくらい不幸なものはないのである。

ぼくをちよいと見た者は、どこを押せばそんな嘆なげきの音ねが出るのかと怪あやしむだろう。身体はぴかぴか黄金色おうごんいろに光つて、たいへんうつくしい。小さい子供なら、ぼくを金きんだと思うだろう。ぼくをよく知っている工場の人たちなら、それがたいへん質のいい真しん鍮ちゆうであることを一目でいいあてる。実際ぼくの身体はぴかぴか光つてうつくしいのである。

ぼくは、或る工場に誕生すると、同じような形の仲間たちと一緒に、一つの函はこの中に詰めこまれ、しばらく暗くらがりの生活をしなければならなかった。その間ぼくは、うとうとと睡ねむりつつけた。まだ出来たばかりで、身体の方々が痛い。それがなおるまで、ぼくは睡りつつけたのである。

それから数十日経<sup>た</sup>つて、ぼくは久しぶりに明るみへ出た。

そこは、倉庫の中であつた。でつぷり肥<sup>こ</sup>えた中年の人間が——倉庫係のおじさんだ——  
ぼくたちのぎつしり詰<sup>つ</sup>まつているボール函<sup>ぼこ</sup>を手にとつて、蓋<sup>ふた</sup>を明けたのだ。

「お前のいうのはこれだろう。ほら、ちゃんとあるじゃないか」というと、別の若い男が  
ぼくたちを覗<sup>のぞ</sup>きこんで、

「あれえ、本当だ。もう一函もないと思つていたがなあ。どこかまちがつて棚<sup>たな</sup>の隅<sup>すみ</sup>へ突込  
んであつたんだねえ。きつと、そうだよ。つまり売れ残り品だ」

といいながら、指を函の中に突<sup>つっこ</sup>込んで、ぼくたちをかきまわした。ぼくはしばらく運動  
しなかつたので、彼の若い男の指でがらがらとかきまわされるのが、たいへんいい気持ち  
だつた。

「売れ残り品じや、役に立たないのか」

中年の男が、腹を立てたような声を出した。

「いやいや、そんなことはない。掘り出しものだよ。ありがたいありがたい。これで今度  
の分は間に合うからねえ。なにしろこのごろは納期がやかましいから、もくねじ一函が足  
りなくとも大きいわぎなんだ」

若い男は、うれしそうに目を輝かして、ボール函の蓋をしめた。ぼくたちの部屋は再び暗くなつた。

「それみる。やつぱりありがたいだろうが。お前からよくもくねじさんにお礼をいつときな。売れ残りだなどというんじやねえぞ」函の外には、倉庫係のおじさんが機嫌をとり直して、ほがらかな声を出す。

「じや貰つていくよ。伝票はさつきそこに置いたよ」

「あいよ。ここにある」

それからぼくたちは、若い男の手に驚掴みにされ、そしてどこともなく連れていかれた。

今から思えば、まだこのときのぼくは希望に燃えて気持は至極明るかった。仲間同士、これからどんなところへいつて、どんな機械の部分品となつて働くのであろうかなどと、われわれの洋々たる前途について、さかんに談じ合つたものである。

函はこの外からは、そのときどきに、いろいろな音響が入ってくる。また人間たちの話声がきこえる。それをじつと聞き分けるのは、たいへん興味のあることだった。

ぼくたちの函が、どすと台の上か何かに載せられたのを感じた。そこはたいへん沢山の大きな機械が廻っている部屋であった。

「はい、もくねじを貰ってきましたよ。これが最後の一函です」さつき聞き覚えた例の若い男の声だ。

「おい待ってくれ。ちよつと中身を調べるから」

別の太い声が出た。

「大丈夫ですよ。倉庫で受取ったときちゃんと調べてきましたから」

「待って待て。お前はこのごろふわふわして、よく間違いをやらかすから、あてにならないよ。それに間違っていれば、すぐ取替とりかえて来てもらわないと、折角せつかくここまで急いだ仕事しごとが、また後おくれるよ。急がば廻れ。念には念を入れということがある」

「ちえつ。十分念を入れてきたのになあ」

「まあそう怒るな。どれ、そこへ明けてみよう」

太い声の男が、ぼくたちを明るみへ出してくれた。ぼくたちは、ざらざらつと、冷たい冷たい鋼板こうばんの上にぶちまけられた。しばらく暗闇くらやみにいたので、眩まぶしくてたまらない。大きな手でぼくたちをなで廻す。

「ほう。これは優級品だ。まだこの手があったのか。おい、これでいいよ。ありがとう」  
ぼくたちは、ここでもまた褒ほめられた。褒めてくれたのは、仕上げの熟練じゅくれん工こうの木田さんとこの産業戦士だった。

「それごらんささい。私はこのごろふわふわなんかしていませんよ。木田さん、この次そんなことをいうと、私はあんたに銃じゅうけん術じゆつの試合を申込みますよ」若い男は得意だ。  
「あははは。銃剣術でお前が張切っている話は聞いたぞ。いつでも相手になってやるが、油を売るのはそのへんにして、早く向うへいけ」

「ちえつ。木田さんはあんまり勝手だよ。油なんか一滴も売ってはいませんよ、だ」  
若い男は、口笛を吹きながら、向うへいつてしまった。

それから木田さんは、また暫しばらくぼくたちを更にほればれと撫なで廻まわっていたが、やがてぼくたちを両手ですくいあげると、別の大きな機械台の上へ連れていった。その傍そばには、び

かぴか光った大きな無電装置のパネルがたくさん並んでいた。これは国際放送用の機械であるらしい。

木田さんは、そこにいた仲間<sup>仲間</sup>に声をかけた。

「おい、もくねじが来たぞ。早いところ、残りの穴へ埋めこんでくれ」

木田さん自身も、ぼくたちを手に掴んでポケットに入れた。それから右手にドライバーを握り、ポケットからぼくたちを一つ摘みあげては、パネルの後側にあるターミナルの並んだアルミの小さい枠を、装置のフレームに取付けるため、両方の穴と穴とを合わせ、その中にぼくたちを植え込み、それからドライバでくるつくるとねじこんだ。

ぼくたちの仲間は、どんどんポケットから出ていった。ポケットの中が空になると、また木田さんはぼくたちを一掴みポケットの中に入れた。その中にはぼくも交っていた。

ぼくは、番の来るのを今か今かと待っていた。

そのうちに太い温い指が、ぼくの胸<sup>どうなか</sup>中をぎゅつと摘んだ。いよいよ番が来たのだ。ぼくは胸を躍らせた。国際放送機の部分品として、これからぼくは永久の配置につくのだ。その機械は、やがて送信所に据えつけられ、全世界へ向って電波を出し始めるであろう。だいとうあせんそうを闘っている雄々しい日本の叫びが、世界中に撒き散らされるのだ。ああ国



際宣伝戦の大花形！ 木田さんは左手で、既にアルミの小さい枠の装置のフレームの穴とぴったり合わせていた。右手の指に摘みあげられたぼくが、その穴に今や挿しこまれようとした瞬間、

「おやア」と、木田さんの異様な声が出た。

「何だい、このもくねじは……。これは出来損いじゃないか。なぜこんなものが入っていたんだろう。誰かぼやぼやしてやがる」そういつて木田さんは、ぼくを機械台の上に立てた。ぼくはどきんとした。

「何を怒っているんだい、木田さん」

横合よこあひから、疝高かんだかい声こゑが聞えた。

「いや、優級品のもくねじだから安心していったんだ。ところがこんな出来損いのが交つていやがる。見掛けは綺麗なただけれど、螺旋らせんの切込み方が滅茶苦茶めちゃくちゃだ。どうしてこんなものが出来たのかなあ」

「どれどれ」

と、疝高かんだかい声こゑの男が、ぼくを指先につまみあげて、眼のそばへ持つていった。熱い息が、下からぼくを吹きあげる。

「なるほど、これはふしぎなもくねじだね。たしかに出来損いだ。それにしても、よくまあこんなものが出来たもんだ。これはあれだよ。旋盤せんぱんの中心が何かの拍子に狂ったのだ。だからこつちとこつちとが、よけいに深く削けずられている。これじゃねじ山は合あっていても細いから、挿さし込こんでもやがてぬけてしまうよ。おお、それに頭がこんなに缺かけているじゃないか。ドライバーをあてがって、力をいれてねじ込もうとすれば、ドライバーがねじの頭から滑すべってしまう。ひどいものを交ませて寄越よこしたなあ。とにかくこれはだめだ」

そういつて、彼はぼくを元のとおり、機械台の上に、頭を下にして立てた。

ぼくの不幸なる身の上は、この刹那せつなにはつきりしたのである。

螺旋がよけいに深く切り込んである。それに頭の一部が缺かけている。ああぼくは何という不幸な身体に生まれついたことであろうか。

目の前が急に暗くくなった。ぼくは台の上で身体をふるわせ、歎なげき悲しみしんだ。折角せつかくりつばな国際放送機の部分品となつて、大東亜戦争完かんすい遂すいに蔭かげながら一役を勤こめることが出来ると思つたのに。

若もしぼくに、羽根があつたら、この台の上からひらりと飛び出して、あの穴へとびこむのだが……。

ことうん  
幸運

すっかり希望を失ったぼくは、機械台の上につまでも震えながら、歎き悲しんでいた。そのうちに、ぼくはとつぜんむずと摘みあげられた。ぼくは愕いた。はつとして目を瞳と、知らない若い男の指に摘みあげられていた。

その若い男は、もう一人の男と、しきりにあまりよくないところの話に夢中になっていた。

「よせよ、大きなこえを出さない。木田さんに聞かれたら、怒られるよ」

「大丈夫だい。木田さんは呼ばれて主任のところへ行つちまった。おい、どうするか、行かないか」

「おれはいやだよ」

「ばか。いくじなし」

そういいながら、その若い男は、ぼくを穴の中へ挿し込んだ。私はこの意外な出来事に、夢かとばかり愕き、そして胸を躍らせた。木田さんが向うへいった留守に、何にもしらないこの若い男が、ぼくをよく調べもしないで、装置の穴の中に挿し込んでしまったのである。やがてぼくの頭に、ドライバーが当てられた、ぐっと圧されて、きりきりと右へ廻された。ドライバーは、何遍かつるりと滑った。そのたびにやり直した。

だがその若い男は、話に夢中になっていたので、文句も云わず何遍でもやり直して、とうとうぼくを穴の中に押し込んでしまったのである。

ぼくは暫く杳然となっていた。

喜んでいいのか、それとも悲しんでいいのか。

自分のあさましい身の上が分ると、ぼくはもう初めに考えていたように、大きなりっぱな機械に抱かれることをすっかり断念しなければならなかった。今の今まで、断念していたのである。

ところが思いがけなく、ぼくは憧れの国際放送機の中に取付けられてしまったのである。こんなうれしいことが又とあろうか。

ぼくを、こうした思いがけないすばらしい幸運へなげこんでくれたこの若い男に対し、

どんなに感謝しても感謝し足りないと思つた。

だが、ぼくの心の隅に、何だかおりのようなものが溜たまっていることについて、ぼくはいささか気にしないわけにかなかつた。というのは、ぼくは公こう然ぜん堂どう々と大手をふつてこの大役にとびこんだわけではなかつたのである。

早くいえば、その若い男が、くだらない話に夢中になつてお蔭で、こんなことになつたのである。それは決して公明正大であるとはいえない。身は一つのもくねじであるが、日本に生まれた以上、やっぱり日本精神を持つてゐる。だからぼくの折角せつかくのこの幸運も、自ら省かえりみて、いささか暗い蔭のさしていることが否いなめない。

それでもいいのであろうか。

声をたてるわけにもいかないので、ぼくはだまつてそのまま成行なりゆきにまかせるより外ほかなかつた。不幸なる幸福！ 少々うしろめたい幸運！

果してぼくは、いつまでも幸福でいられるであらうか。

その後ぼくは異状がなかった。

多くの取付けられた放送機は、それからのち方々へ廻った。

多くの時間が、この装置の試験に費された。装置には、真空管も取付けられ、すっかりつぱになったところで、はじめて電気が通され、計器の針が動いた。

試験をしていると、装置はだんだん熱してきた。ぼくはあまり暑くて、しまいには汗をかいた。

そのうちに試験も終り、荷作りされた。

ぼくはトラックに揺られ、それから貨車の中に揺られ、放送所のある遠方の土地まで搬ばれていった。

そこから先、またトラックにのせられ、寒い田舎を搬んでいかれた。

そして遂に放送所についた。

多くの取付けられている機械は、函から出された。そこには多勢の技師が待っていた。

「ああよかった。これで安心だ。間に合うかどうかと思つて、ずいぶん心配したなあ」

その中の一等年齢をとった人が、そういつて一同の顔を見廻した。

それからぼくの機械は、多勢の肩に担がれ、二階の機械室まで持っていかれた。

この機械を据えつける基礎はもうちゃん出来ていた。機械はその上に載せられた。うまくボルトの中に嵌らないらしく、盛んにハンマーの音がかんかん鳴った。

その震動は、ぼくのところまでもきびしく響いてきた。

「おや、これはいけないぞ！」

ぼくは気がついた。たいへんなことが起りかけた。ぼくの身体が、穴から抜けそうである。

あんまりがanganやるからいけないのである。基礎がちやんとうまく出来ていけばよいのに、それが寸法どおりっていないものだから、ハンマーをganがんふるわなければならぬのだ。それは全くよけいな心配をぼくにかける。いや今となつては、単なる心配ではない。ハンマーがガンと鳴るたびに、ぼくの身体は穴からそろそろと抜けていくのであった。

「おい、ねじが抜けるよ。誰か来て留めてくれ」

ぼくは人間に聞えない声で、一生けんめに怒鳴った。

仲間のもくねじたちは、きつとぼくの悲鳴を聞きつけたにちがいない。しかし、彼等の力ではどうすることも出来ないのだ。

ガーン、ガーン、ガーン。

呀あつという間に、ぼくは穴からすつぽりと抜けてしまった。そして小さい声をたてて、コンクリートの床に転ころがった。頭の角かどをいやというほどぶつつけた。ああ万事休す！

ぼくは、又もや大きな悲しみの淵ふちに沈かんだ。床から機械の元の穴まではずいぶんはるかの上だ、翼つばさない身は、下からとびあがっていくことも出来ない。

悲しみの中にも、ぼくはまだ少しばかりの希望いを抱いだいていた。

それは誰かがぼくの傍そばを通りかかって、ぼくが転がっていることに気がつくのだ。おや、こんなところにねじが落ちている。一体どこのねじが抜けたんだろうと行って、その人が親切に、ぼくの入るべき元の穴を探してくれれば、ぼくはたいへん幸福になれるのであった。どうか、誰か技師さん、ぼくを見つけてくれませんか。

しかし実際は、ぼくを見付けてくれる人間は一人もいなかったのである。運のわるいときには悪いことが重かさなるもので、それから三十分ばかり経った後のこと、技師の一人がこつこつと靴音を響かせて、ぼくの転ころっている方へ歩いて来たが、その靴先がぼくの身体に



当つて、ぼくはぼーんと蹴とばされてしまった。

なにしろ軽い身体のぼくのことであるから、たちまち床をごろごろと転つた末、部屋の隅にあつた木箱の壊れが<sup>こわ</sup>つみあげてあるその下へもぐり込んでしまった。ああ、もう観念の外はない。再びあのりっぱな機械の穴へは戻れないことになってしまった。

流<sup>る</sup>転<sup>てん</sup>

それから先の話は、あまりしたくない。

ぼくは二十日、壊れた木箱の下にいた。

やがて工事場の取片づけが始まつて、木箱は部屋から外へ搬<sup>はこ</sup>ばれていった。そのあとに、ぼくは、コンクリートの魂<sup>かたまり</sup>や縄<sup>なわぎれ</sup>片などと一緒に残つていた。ぼくの身体はもう埃<sup>ほこり</sup>にまみれて、かつて倉庫番から褒<sup>ほ</sup>めちぎられたときのような金色<sup>きんいろ</sup>の光沢<sup>こうたく</sup>は、もう見ようとして見られなかつた。全身<sup>ぜんしん</sup>は艶<sup>つや</sup>をうしない、変に黄色くなつていた。

埃と一緒に、ぼくは掃き出された。そして放送所の後庭あとにわに掘つてあるごみ捨て場の方へ持つていかれた。いろんなきたないものと一緒に、じめじめした穴の中に、ぼくは悲惨ひきさんな日を送るようになった。身体はだんだんと錆さびて来た。青い緑ろくしゅう、青がふきだした。ぼくは自分の身体を見るのがもういやになった。

思えば、ぼくほど不幸な者はない。こんな不幸に生れついた者が、またこの世にあるだろうか。ぼくを生んだ人間が恨めしい。もつと気をつけて旋盤せんばんを使つてくれればよかったんだ。

しかしぼくも途中でちよつぱり幸福を味わったことがあった。それはあの若い職工さんが、くだらない話に夢中になって、僕を放送機の孔あなに取付けてくれたからだ。あれから、この放送所へ来て、試験が行われている間までは、ぼくはたしかに幸福であつたといえる。だが、今から考えてみると、それは間違つた幸福だつた。元々あの若い職工さんが、誤あやまつてぼくを放送機にとりつけたのであつた。だからぼくは当然今のようなみじめな境きようか界かいに顛落てんらくすることは、始めから分り切つていたのである。間違つた幸福をよろこんでいたぼくは、何というばかだつたらうか。

或る日、このごみ捨て場に、舎宅しゃたくの子供たちが三四人で遊びに来た。汚いところだが、

子供たちには、たいへん興味のある遊び場であるらしい。子供たちは、みんな女の子であった。ごみの山の上を、上<sup>あが</sup>つたり下<sup>お</sup>りたりして遊んでいるうちに、一人の鼻たらしの七つ位の子供が、ふとぼくを見つけて、小さな掌<sup>てのひら</sup>の上へ拾い上げた。

「いいものがあつたわ。これは、きたないけれど、ねじ釘<sup>くぎ</sup>でしょう。お家へ持ってかえて、お母さんにあげるわ。額<sup>かぶ</sup>をかけるのに釘が欲しいってお母さんいつていたのよ」

ぼくは、その子供の小さい手に握<sup>か</sup>られていた。そして身体がほかほかと温<sup>ぬ</sup>くなった。

「どれ、見せてごらん」

別の子供がやって来た。ぼくの主人は、小さな掌をひらいた。すると相手が大きな声を出した。

「まあ、きたないねじ釘ね。その青いものは毒なのよ。そんなものを持っていると手<sup>て</sup>が腐<sup>くさ</sup>るから捨てちやいなさい」

「まあ……」

ぼくは、ぼいと捨てられてしまった。そこは所内の通路の上で、雨ふりの日のために、舗装<sup>ほそう</sup>道路<sup>どろ</sup>になっていた。ぼくは赤<sup>せき</sup>面<sup>めん</sup>した。もう何も考えまい。

ぼくは目をつぶって死んだようになっていた。が、最後にりっぱな人に拾い上げられた。

それはこの放送所の所長さんであった。どうしてこの小さいぼくが見付かつたんであろうか。所長さんは、日向ひなたに立ち留とどまつて、ぼくを摘つまみあげ、つくづくと見ていた。

「やれやれ可哀想に、このもくねじは……。生まれながらの出来損できそこないじゃな。ここへ捨てられるまでは、さぞ悲しい目に会ったことじやろう。おい、もくねじさん。お前はここのままじゃ、どうにもうだつが上らないよ。だからもう一度生れ変わってくることだね。真まこと鍬くわの屑くず金がねとして、もう一度製錬所せいれんじょへ帰かえつて坩堝るつぼの中でお仲間と一緒に身体を熔とかすのだよ。そしてこの次は、りっぱなもくねじになつて生れておいで」

所長さんのやさしい言葉に、ぼくは胸がつまって、泣けて泣けて仕方しかたがなかった。さすがに技術で苦労した所長さんだ。ぼくのような出来損できそこないのもくねじの人生を考えてくださる、この情け深い所長さんの言葉によって、ぼくはこれまでの身を切られるようになつたことを、一いっ遍ぺんに忘れてしまった。ああよかった。やがて所長さんは建物の中に入って、ぼくを木箱きばこの中にぼくと入れた。その箱には「屑くず金がね入れ」と札がかかつていた。





# 青空文庫情報

底本：底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「譚海」

1943（昭和18）年1月

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# もくねじ

海野十三

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>